

# 文化遺産とこれを取り巻く 歴史都市を自然災害から守るために

立命館大学  
理工学部教授・  
歴史都市防災研究所 所長  
**大窪健之**  
Takeyuki Okubo



## はじめに

文化遺産とこれを核とした歴史都市は、長きにわたる人間の、そして地域固有の文化的活動が結晶として表徴したものである。それゆえに文化は地域に住む人々のアイデンティティーそのものであり、なによりもこれらを失うことは、人類にとって歴史を失うこと、すなわち世代を超えて築き上げてきた記憶そのものを失うことに等しい。また、ひとたびこれらを失うことになれば、再生することは二度とできないということも忘れてはならない。人の命が何物にも代えがたいものであることと同じく、歴史を紡い

できた文化とその文化遺産は、無二の社会的共通資産なのである。

一方で災害は、自然現象に起因する脅威であり、その現象の発生そのものを止めることは、高度な科学技術を誇る現代においても不可能とされている。これまで幾多の文化遺産を失ってきた戦乱や政治的混乱に加えて、現在最も対策が求められているのは、自然災害からいかに歴史都市を守り抜くのかという命題なのである。特にわが国の歴史都市を鑑みると、人間的なスケールを保つ街路とこれに沿って伝統的な木造建築が建ち並ぶ美しい風景が想起されるが、災害危険性という視点から見れば、狭く複雑な

街路は緊急車両の進入を阻み、木造密集市街地は阪神・淡路大震災の例を振り返るまでもなく、地震などに起因する都市火災に対して極めて脆弱な特性を持つ。しかし、災害安全性を追求するあまり、街路を拡張し建物を鉄筋コンクリートや鉄骨で更新することなどに過度に傾倒してしまえば、今度は人の手によって文化的価値を未来永劫に葬り去ることになってしまう。問題は文化的価値の保全と災害安全性という、これら一見相反する二つの価値を如何にバランスさせるかにかかっている。

## 防災から伝統的な減災の知恵へ

これまで災害をゼロにしようとする防災という視点に立って、日本が世界に誇る近代的テクノロジーばかりが注目される傾向にあったが、東日本大震災をはじめ近年の度重なる大規模災害は、その限界をも私たちに突きつける結果となった。今私たちが考えなければならぬ対策は、いかにして被害を最小限にとどめるかという減災の視点と云えよう。

この視点に立てば、文化遺産とこれを取り巻く歴史都市は、私たちにとって守るべき対象であるだけでなく、学ぶべき先例ともなる。そもそも文化遺産や歴史都市は、長い歴史の歴史を乗り越えてきたからこそ、今も私たちの目の前に存在し続けているのである。近代的な防災技術も存在しない時代から度重なる災害を潜り抜けてきたその経験値は、むしろ現代の防災技術が通用しないような大規模災害に際しても、極めて有用な知見をもたらす可能性を持つ。

例えば日本を代表する歴史都市・京都において、明治時代に開削された琵琶湖第一疏水は、自然の高低差を利用して琵琶湖から京都へ導水することにより、水道、発電、農業用水、防火用水などの多機能インフラとして整備された。重力を利用する開水路という極めてシンプルな技術で実現されているからこそ、現代の上水道

が機能しなくなるような大規模災害時においても活用できる可能性がある。これは京都を代表する伝統的景観を担保する文化遺産であると同時に、将来の地震火災に備えるに不可欠な、重要な防災水利として位置づけられる資源なのである。

## 歴史に学ぶ減災の知恵

このような視点は、私たちに對してジレンマを解消する新たな可能性を開く。例えば飛騨高山の重要伝統的建造物群保存地区においては、連担する民家の土蔵や寺社の緑地を再生することが文化的景観を保全するとともに、都市火災に對する貴重な防火帯を維持することに繋がっている。二〇一一年三月の東日本大震災の津波被害は、指定されていた避難所をも飲み込む事態となったが、地域に根差した神社や寺が臨時の避難所となって多くの人々の命を支えた。昔からその地にある社寺は、繰り返される津波災害を経て安全な場所へ移されてきたものであり、まさに現代の駆け込み寺として機能したのである。二〇一五年の四月から五月にかけてネパールの発生したゴルカ地震では、密集する煉瓦造の建物群に囲まれた伝統的な中庭と、普段は宗教学行事に使われる水場が、観光客を含む人々の

避難生活を支えていた。さらにひとつ前の一九三四年のビハール・ネパール震災でも、同様な活用実績があることが明らかとなった。このようにわが文化遺産の防災拠点化は、文化遺産の活用に伴い増大する観光客の命を支える意味でも、社会的意義は大きい。一方で二〇一六年の年末に発生した糸魚川駅北大火では、現代の消防力をもってしても防げなかったことから大きな衝撃をもたらした。その後の調査では伝統的な雪害対策である雁木と呼ばれる雪除けのアーケードが、隣棟への延焼火災を助長したとの報告もある。もし雁木の軒裏下地と建物間の境界面だけでも耐火性の材料で仕上げることができれば、延焼の抑止に繋げることができる。

このように伝統的な減災の知恵を活かし、さらに現代の最新技術で補完することができれば、文化的価値の再生と災害安全性の向上は両立できる可能性がある。むしろ減災の知恵を学ぶことは、将来の大規模災害への対策を考える上で、私たちに大きなヒントをもたらしてくれる。減災の考え方は、幾多の災害の経験から時間をかけて編み出されてきた知恵、すなわち文化である。歴史ある街並みに織り込まれた減災文化を守り発展させることは、現代を生きる私たちに課された将来世代へ向けた責務であると考える。